

## パリ第7大学、ベルシー地区 および東洋言語学部図書館案内

山崎 真紀子(法学部教授)

はじめに私が1年間在外研究のために所属しているパリ第7大学の場所について記したい。渡仏前に購入した最新版旅行ガイドブックでは、パリ第6大学と並び、ソルボンヌ大学にも近いカルチェ・ラタン(パリ5区・パリ左岸中心部)にその場所が記されていた。雰囲気の良い書店が立ち並び、サルトルやポーヴォワールが仕事場代わりに使っていたカフェ、レ・デュ・マゴやカフェ・ド・フロールなど老舗のカフェもあり、そこに座って買ったばかりの本を眺める楽しみを抱いていたのだが、残念なことに2年前にカルチェ・ラタンからベルシー地区(パリ13区)に転居してしまった。この地は現在目まぐるしく開発されている地域で、新しい可能性を感じさせる場所である。近くにはドミニク・ペロー設計の、4冊の本を開いたような18階建てタワーが4つ向かい合うように建てられた新国立図書館(通称ビブリオテック・フランソワ・ミッテラン)があり、新しいメトロ14番も開通した。おしゃれな映画館もある。半年前に大型書店もオープンし、新しいカフェも次々と誕生している。大学の前には公園もでき、やがては巨大な第二のカルチェ・ラタンとなる可能性が感じられる場所である。

パリ第7大学の前身はソルボンヌ大学であるが、1968年の5月革命以後、大学を増やすことになり、パリでは13校新たに設置された。そのうちの一つであるパリ第7大学は、1970年に設立されたのである。現在パリ・デイドロという名称を広めようとしている。理由は数字だけでは味気ないから、「百科全書」を編集した18世紀のフランスの啓蒙思想家である名前を冠したそうだ。

目下いくつかの校舎を建築中であり、いずれ精神分析学部、英米文化学部、地理歴史学部、医学部もこの地に転居してくる予定らしい。現在あるのは、仏文学部、映画学部、物理学部、科学学部、自然学部、そして私の所属している東洋言語学部であり、総勢27000人が学んでいる。東洋言語学部は日本、中国、韓国、ベトナムの4ヶ国語から成っている。この学部があるフロアに、東洋言語専門の図書館がある。中国語の本が最近寄贈されたこともあり、最も多くて2万冊。日本語の本は8000冊しかない。これでは足りないのではないかと心配になったが、2011年には800メートル先の場所に、パリで日本語を学ぶことができるもう一つの大学であるフランス国立東洋言語文化大学(通称INALCO)の図書館が転居してくるらしく、そこには日本語の図書も多いのでもう少しの辛抱とのことであった。

第7大学の東洋言語図書館には日本のマンガもある。私はこの図書館で、パリに来て間もなくその人気のほどを知った「ナルト」と

いうマンガを読んだ。とにかく、いま日本のマンガ人気は予想をはるかに超え、私は7月初旬に開かれたジャパン・エキスポという日本好き若者のフェスティバルを見てきたが、アニメやマンガのコスプレ姿をみんな楽しそうに披露していたし、人気漫画家のサイン会もあり、任天堂Wiiも人気が高く、すべてが熱狂的であり日本ブームを肌で感じる事ができた。

日本語を学びたい動機もマンガなど日本のポップカルチャーブームによるらしい。しかし、外国語の習得は非常に難しく、マンガが好きだから、アニメが好きだからという理由では続かないそうだ。パリ第7大学で日本語学科入学者が200名、イナルコで700名だが、修了者(ストレートで3年)は40%、1年日でごっそり辞めていくそうだ。フランスは幼稚園から落第があると聞いたが、もちろん大学は最も厳しく、そう簡単には進級できないらしい。ちなみに本館の図書館には日本語の本はない。ただし、村上春樹をはじめ小川洋子や川上弘美など最新の小説がすぐにフランス語に翻訳されている現在、この図書館にもそれらの翻訳本が所蔵されていた。

本館の図書館からはセーヌ川が見える。新興地でもパリらしい風景にも出会えるのである。



図書館内



パリ第7大学 外観